九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

景観にさぐる中世 : 変貌する村の姿と荘園史研究

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

https://hdl.handle.net/2324/21647

出版情報：1995-12-20. 新人物往来社
バージョン：
権利関係：

あとがき

むかし大学院入試に、自分自身の歴史学に影響を与えた本を一冊選んで論評せよ、という問題が出た。私は古島敏雄『土地に刻まれた歴史』（当時岩波新書）を選んで答案を作成した。今もしも同じく問われることがあったならば、一冊ではなく、あと二冊を加えて答えさせてもらいたいと思う。即ち柳田国男『地名の研究』（当時角川文庫）と今井登志喜『歴史学研究法』（東大新書）の二冊である。これら三冊の文庫・新書から受けた影響については、既にしばしば述べてきたが、一言でいえば古島の著作からは景観に含まれる歴史の重要性を、柳田の著作からは地名のもつ歴史史料としての価値を、今井の著作からは史料学・史料批判の基本と多様性を学んだ。そしていつかはこの三冊の方法を総合して、文字・記録を残さなかった過去の人々のくらしを明らかにする著述を行ないたいと考えてきた。

本書において、私は景観・地名を歴史学の素材（史料）として歴史叙述を行なったが、この景観・地名が急速に失われつつあることは、縷々述べてきたつもりである。本書に挿入した巻末地図では、原則として小字は赤、通称地名は緑色で示すようにした。このうち緑色地名（通称地名）は、一部は近世の村絵図などに記されていたものだが、大半のものは私自身が古老からの聞き取りによって収集したものである。聞取調査を行なっていなければ、おそらくは永久に失われ、未来に伝えることはできなかった情報であろう。こんな地名が日本列島にはまだまだ何万倍もの量が未調査のまま、とり残されている。願わくば読者諸賢には、通称地名をわざわざ緑色で印

刷したことへの、著者の思いを汲み取っていただきたく思う。

著者にとっての地名収集は一つには時間との、一つには量との競争である。前者の時間に関しては、本質的には悲観的にならざるを得ないが、当面は楽観的に考えたい。というのは、私が最近に調査したフィールドで次のような経験をしたからである。そのフィールドとは中世干拓史料のある肥前国河副庄故地（佐賀市南郊から川副町一帯）なのであるが、そこの下武という村では、たまたま村のお堂で区役のお茶休みをしておられた婦人会の方々からお話を聞くことができた。十数人おられた婦人会のメンバーの中で、最も地名に精通していた人は、私よりはいくらか年上といった感じの方で、そのグループの中では最も若い人だった。本書中佐賀県に関する部分で述べたように、この一帯も行政小字は歴史地名とは無関係の数字小字である。

字（あざ）は一本松とか二本谷とか、ついとろう。あげなんは覚えきらんもん。うちでは今もこげな「しこ名」ば使うよ。

と多くのしこ名を教えて下さった。

しかし量との競争を考えると、あと二人、三人の自分がほしいと切実に思うことがある。分身願望である。

私は昭和五十三年から文化庁文化財保護部記念物課に勤務してきた。この職場では多くの人々との出会いがあったが、なかに同じ問題意識をもつ人との出会いもあった。私の責務はこうした人たちとの連絡役をつとめることと思った。例えばこの十余年の間にいくつかの荘園遺跡で荘園調査が進められる等のことがあったが、行政機関による荘園調査（地名収集も含む地表上の旧景観の記録保存）は私がこの職場で一番やりたかった仕事であり、今後も一層の推進を図っていきたい。

本書は文化庁勤務のかたわら、その余暇に書きためたものを中心に、再構成をしてみたものである。行政機関にある中で、研究をも行なうことは、世間的にいえば二足のわらじを履くことである。「二足のわらじ」という語義は辞書によれば本来は矛盾した行為、両立があり得ない行為をいうのだそうである。二足のわらじは、履くというよりは、つま先にひっかける程度であったが、その歩きづらさは身にしみて痛感した。しかし一度の人生で二人分の人生を生きるつもりで、また同じような境遇の中で頑張っている文化財保護行政に携わる研究者たちとの連帯意識に支えられて今日までやってきた。制約の多い、限られた時間内での作業には困難なものがあり、思わぬ過ちもあるやもしれず、正直なところもう少し余裕のある中での刊行の方が良かったと思うこともあったが、各地の荘園遺構の消滅と、そのことからくる焦燥が、本書の刊行を急がせた。読者の御海容を願いたい。

最後に私事を述べることを御許容願いたい。名古屋の小さな薬屋に生まれた私は、小さい頃から歴史と史跡が好きで、中学生の頃には週末土曜日には県立図書館にいって郡史・市町村史を筆写し、翌日曜日には自転車にのって濃尾平野の各村毎に所在する中世城館跡を探訪することを繰り返していた。大学進学の際も、長男で男一人であるにもかかわらず、家業のことなど考えることもなく、文学部で歴史を学ぶことを希望した。両親は内心は別の道を希望していたこととは思うが、とりたてて反対もしなかった。以後四半世紀を経て、やっと図書らしきものを公刊することができた。郷里で本書の刊行と、第二子の誕生を心待ちにしている両親に、どうやらその両方を同時に届けることができそうなことがうれしい。

一九九一年十二月

追記

右の文章を書いてから三年以上の歳月が流れた。正直にいえば本書はもっと早く、もう少し別な形で刊行される予定であったが、種々の事情で頓挫していた。要するに、この様に図版・地図類の多い書物の出版は今日、もはや困難にすぎるということであろう。この窮地を救ってくださったのが、新人物往来社・酒井直行氏である。まさに生涯の恩人という他はない。あとがきの追記とはおかしいが、このことは明記し、この遅れのために御迷惑をおかけした方々におわびするとともに、改めて酒井氏に感謝したい。酒井氏御夫妻、著者のわがままに応えて下さった同社小山光氏、また闘病生活の中で困難な作図にあたられた佐藤信行氏と奥様、校正にあたられた開窓社・堀正明氏らには心よりお礼を申しあげる次第である。

この三年間に右に記した次男は無事に生まれ、既に三歳の誕生日を迎えたが、父鎮雄は平成五年四月三十日に永眠した。まもなく三回忌である。そして私は十六年間勤務した文化庁記念物課から、九州大学大学院比較社会文化研究科に異動した。本書はわが文化庁時代の一応の研究成果ということになる。

父には本書のゲラをみせたことがある。ある日病床で勘違いした父から、「おい、あの本は売れとるのか」と聞かれたことがあった。返事が遅きにすぎたが、親父とはいつでも話はできる。何といって返事をしようか。「あかすか、売れえへん」となるのか、「ちょびっとだけだわ」となるのだろうか。

乙亥暮春

校門の両側に咲く満開の桜をみながら

福岡・六本松にて

服部　英雄

表・系図・図・史料

【第Ⅰ部】

第二章

表 B-1　渡里の田畑等等級表　65
表 B-2　岩瀬村石高　69
表 B-3　下岩瀬水田の等級　70
系図B-1　岩瀬氏系図　69

第三章

表 C-1　慶長12年10月17日長岡村地詰帳及び慶安3年長岡村検地帳　83
表 C-2　安永8年下小幡村御田高帳覚ならびに嘉永4年下小幡村田畑反畝歩改帳　86

第六章

表 F-1　Ⅰ東国のミソサク、ミショウサク　159
表 F-2　Ⅱ防長のヨウジャク　160
表 F-3　Ⅲ二豊のユウジャク　161

第七章

表 G-1　三潴庄に関する中世文書群　169
表 G-2　現在の水系上に分類した中世荒木村の耕地地名　172
表 G-3　広川流域の用水　173
表 G-4　宝暦7年頃の三潴庄域の水がかり　198
図 G-1　クリーク地帯の灌漑模式図　169

【第Ⅱ部】

第一章

表 H-1　各県別の小字概数と1小字当りの面積比較　217

第三章

表 J-1　遷保庄における小地名の変化　233

第六章

表 M-1　大和盆地における古代中世地名と現地名の比較　258

【第Ⅲ部】

第一章

表 Q-1　大池がかりの本田・新田　314
表 Q-2　中世文書にみえる池、溝、井料　317
表 Q-3　内検帳にみる中世地名　318

第二章

表 R-1　山内文書にみる主な庶流文書　348
表 R-2　現在に残る名　358
表 R-3　山内通資（妙通）譲状に見る高山門田ほかの四至境　366
表 R-4　地毗庄荘園領主の変遷表　389
別表　河北村における領家年貢の変遷　402
系図R-1　山内系図　338
系図R-2　広沢系図　341
別系図　安井宮をめぐる系譜　401

第三章

表 S-1　鎌倉末期から南北朝期にかけての三入庄の領有状況　412
系図S-1　熊谷氏系図―熊谷文書登場人物系譜推定図―　410

第四章

表 T-1　国延保の22名と荘官給　426
表 T-2　国信・末長・末吉の灌漑水系　429
系図T-1　大江氏系図　417

第五章

表 U-1　金田庄の名構成　461
史料U-1　二階堂氏領地　豊前国金田荘田畠注進坪付　440

第六章

表 V-1　武雄神社文書の整理Ⓐ第一群　472
Ⓑ第二群　475
Ⓒ解状と外題直人証判の整理　475
表 V-2　花島村所領の田積　499
表 V-3　村立事にみる課品数　520
表 V-4　村立事にみる各村々　521
表 V-5　文書伝来（1）小鹿島文書の伝来　529
（2）橘中村文書の伝来　529
系図V-1　橘薩摩氏の系図　509

【第Ⅳ部】

第二章

表 X-1　中世城館におけるくるわの呼称　592

地図F-3　安養地の用作　126
地図F-4　小鯖の幼若　127
地図F-5　平井の用作　130
地図F-6　奥小野の用作　131
地図F-7　小郡・木船の用尺　132
地図F-8　上保木の用借と大井手　139
地図F-9　茶屋川の用借　142
地図F-10　行政の用作　143
地図F-11　防迫の用作　144
地図F-12　粟野の用作　146
地図F-13　厚母郷の用作　147
地図F-14　山野井の用尺　148
地図F-15　船木・伏付の用作　149
地図F-16　東須恵の用尺　150
地図F-17　如意寺の用作　152
地図F-18　生雲東分・持坂西の用着　154
地図F-19　栢木の用作　156
地図F-20　豊前・宇野の遊作　165

第七章

地図G-1　荒木村の中世地名　170
地図G-2　田川用作の地籍図　177
地図G-3　五ヶ村井手と荒木・田川地形図　178
地図G-4　楢津　183
地図G-5　奥牟田の用作周辺　184
地図G-6　神崎庄：用作の通称地名と近世小字　巻末
地図G-7　三潴庄の一部　192
地図G-8　八院・白垣小字地図　194

【第II部】

扉

地図　近江八幡の小字名　211

第一章

地図H-1　西九条、東九条、神殿周辺の小字と通称地名　巻末
地図H-2　稗田の小字と通称地名　巻末
地図H-3　法華寺の現小字と近世小字　巻末

第二章

地図I-1　鵤庄の小字と通称地名　巻末

第三章

地図J-1　近江国邇保庄における中世地名と現地名の比較　234

第四章

地図K-1　小塩庄図に画かれた地名と現地名の比較　240

第五章

地図L-1　乙訓郡条里地域の小字と通称地名　巻末
地図L-2　久我庄の中世地名と名の分布　248

第七章

地図N-1　福井庄の名田分布と通称地名　262

第八章

地図O-1　万行保故地の地名　266
地図O-2　奥原保故地の地名　269
地図O-3　奥原保・館の垣内の旧地籍図　269

第九章

地図P-1　三田川町吉田、豆田の小字　274
地図P-2　三田川町吉田、豆田のしこ名　276

【第III部】

第一章

地図Q-1　福井庄の小字と通称地名　巻末
地図Q-2　八代湾岸の干拓状況　306
地図Q-3　大部庄の小字と通称地名　313

第二章

地図R-1　和知庄全体図　342
地図R-2　地毗庄（本郷・市村・田原・殿垣内）の耕地と村落　352
地図R-3　永江庄の船頭垣内付近　360
地図R-4　譲状から復原した高山門田ほかの境界　367
地図R-5　山内通資（妙通）がその子らに譲与した高山門田ほかの四至境　368

第三章

地図S-1　三入庄上町屋、下町屋周辺の小字と通称地名　巻末
地図S-2　町屋周辺地図　406

第四章

地図T-1　国延保の小字と通称地名　巻末

第五章

地図U-1　金田庄故地周辺　450
地図U-2　四郎丸名と南木久永名　452
地図U-3　宮得名の復原　455
地図U-4　市津・石松地区における石松名・土内名の復原　457
地図U-5　金田村の条里制耕地の復原　458

第六章

地図V-1　長嶋庄全体図　476
地図V-2　長嶋庄の小字と通称地名（しこ名）　巻末
地図V-3　武雄市の条里復原図　487
地図V-4　花島村の名田・浮田分布　490
地図V-5　甘久条里区　495

【第IV部】

第一章

地図W-1　鎌倉街道と江馬氏城館　542
地図W-2　江馬下館周辺の地名と屋号　544
地図W-3　千葉県本佐倉城跡の周辺　547
地図W-4　甲斐の城館分布と烽火路　552
地図W-5　願海寺付近の小字・俗称・屋号　555
地図W-6　大野城図　564
地図W-7　アナギノフカ土城　565
地図W-8　上ノ国勝山館　566

第二章

地図X-1　甲斐ののろし道　571
地図X-2　萩藩ののろし道と付表（萩藩の狼煙場）　574
地図X-3　長崎及び大村領内ののろし台　578
地図X-4　八重山の烽火経路　586

【第 III 部】
扉
写真　花島村の景観　291
第一章
写真Q-1　福井庄の空中写真　297
写真Q-2　畑（地畑とよばれる）として残る砂堆　298
写真Q-3　近世天満村絵図と天満村樋門模式図　298
写真Q-4　くんがら樋門を内陸側からみる　302
写真Q-5　つっきり樋門　302
写真Q-6　明治初期 平松村絵図に画かれた樋門　303
写真Q-7　八代湾岸の干拓状況　307
写真Q-8　大部庄の空中写真　312
写真Q-9　敷地のといづめから高位段丘方面をみる　321
写真Q-10　大井（おゆ）の川　322
写真Q-11　津荷万歳峠の麓にある一遍名号碑　329
写真Q-12　湯の峯を流れる川　330
写真Q-13　熊野御幸道・継桜王子より、小栗街道があったという三日森・ごんにゃく山の稜線をみる　330
第二章
写真R-1　甲山城周辺の空中写真　355
写真R-2　本郷の水田　356
写真R-3　延明池　370
写真R-4　上流側からみたおおのの池つつみ跡推定地　373
写真R-5　下流側からみたおおのの池つつみ跡　373
写真R-6　田原溝　376
写真R-7　池原周辺からのぞむ甲山城跡　380
写真R-8　祐増借書　386
第三章
写真S-1　根の谷川流域　408
写真S-2　土居より熊谷氏の居城高松山をみる　409
写真S-3　木樂井手　409
第五章
写真U-1　二階堂文書　正平11年取帳の一部　446
写真U-2　金田町・赤池町周辺の条里制耕地　449
写真U-3　泌泉　453
写真U-4　麦秋の金田庄故地　453
写真U-5　神崎の字三十六　456
第六章
写真V-1　武雄市の空中写真　486
写真V-2　東福寺谷の景観　494
写真V-3　東福寺谷　494
写真V-4　磐井八幡社から下十の坪、五の坪の条里地割をみる　495
写真V-5　屋敷坪の島畑景観　501
写真V-6　「十九」周辺からみた花島村　501
写真V-7　廿治（ハタチ）周辺からみた花島村　503
写真V-8　花島村・村のなかの景観　503
写真V-9　戸井渡（樋渡）、小薬屋敷推定地の島畑景観　505
写真V-10　三方潟村絵図より、中村・渋江・牛島　513
写真V-11　改修以前の大日井樋　513
写真V-12　中村館跡　513
写真V-13　大日橋からみた中村　514
写真V-14　梅宮　515
【第 IV 部】
扉
写真　昭和30年代の名古屋市近郊の城跡　535
（上）　小田井城遠景
（中央）清須城跡
（左下）小田井城跡の碑
（右下）小幡城跡
第一章
写真W-1　上ノ国勝山館　567
第二章
写真X-1　発掘調査中の琴ノ尾烽火台　577
写真X-2　弘前ののろし　584
写真X-3　西蝦夷地の烽火台　584

地図

【第 I 部】
第一章
地図A-1　仁保庄土井河内周辺　29
第二章
地図B-1　明治初期の下小泉村　44
地図B-2　群馬県太田市強戸　46
地図B-3　沖之郷、里矢場周辺地図　49
地図B-4　渡良瀬扇状地の地形面分布　50
地図B-5　里矢場周辺の地形と遺跡　53
地図B-6　卒島村・今里村地割図　57
地図B-7　関城町舟玉周辺　60
地図B-8　幡のミソフ柵　62
地図B-9　瑞竜町小野のミソウ作　63
地図B-10　圷渡の『土地宝典』とミゾウサク　64
地図B-11　西塩子のミソウ作　68
地図B-12　下岩瀬の味相作　71
地図B-13　出島村牛渡の小字　72
地図B-14　田村の味惣作　74
地図B-15　茨城県茨城町下飯沼の見正作　76
第三章
地図C-1　真壁：上小幡、下小幡、長岡、白井の小字と通称地名　巻末
地図C-2　加波山系の小字と通称地名　巻末
地図C-3　クドリからの分水　90
第四章
地図D-1　遠江国初倉庄藤守郷一帯の小字と水系及び堤　100
第五章
地図E-1　与田保故地の地形図と小字名　106
地図E-2　河添用作（夕作）周辺の地形と地名　110
地図E-3　条里耕地復原案　115
第六章
地図F-1-A　西佐波令の用着　119
地図F-1-B　乙井手と一本樋　120
地図F-2　大崎の用尺　122

図版索引

写真

【口絵】
写真1　群馬県下小泉村地籍図
写真2　小山市卒島
写真3　小山市梁
写真4　福井庄天満村の近世絵図
写真5　福井庄の砂堆（地畑）
写真a　荘園の四季（春）
写真b　荘園の四季（夏）
写真c　荘園の四季（夏）
写真d　荘園の四季（秋）
写真e　荘園の四季（冬）
【第Ⅰ部】
扉
写真　(上)近世梁村検地帳　25
(下) 明治15年小字名取調書
第一章
写真A-1　土井周辺　30
写真A-2　屋号泉　30
写真A-3　用作と清水　30
写真A-4　殿井手　31
写真A-5　浅地の養着　31
写真A-6　長寿寺跡　31
写真A-7　深野の用作　32
第二章
写真B-1　碓神社周辺　48
写真B-2　弘法水　53
写真B-3　里矢場の御正作　54
写真B-4　卒島周辺の空中写真　56
写真B-5　梁の味正作と鬼怒川河道　58
写真B-6　玉川村・西塩子のミソウ作　66
第三章
写真C-1　圃場整備前の長岡旧水田　79
写真C-2　建武2年、長岡宣政譲状　82
写真C-3　圃場整備前の下小幡の旧水田　88
写真C-4　長岡のミソザク　92
写真C-5　改築前の長岡ゆうさんのお宅　93
第五章
写真E-1　今出の用作　108
写真E-2　梶の家から、屋号・重永と延常　108
写真E-3　上流からみた炙川の堤防　112
写真E-4　堀川　112
写真E-5　梶の池から夕作にかけての景観　113
写真E-6　迫の池の下方から新庄・大祖、兵者方向をみる　113
第六章
写真F-1　西佐波令・中河原の用着周辺　120
写真F-2　小鯖毛割の幼若　128
写真F-3　平井の用作　128
写真F-4　小郡・木船の用尺　133
写真F-5　石ノ口の一帯　134
写真F-6　大野の一帯　135
写真F-7　尾国の一帯　137
写真F-8　尾国の用作　138
写真F-9　尾国の用作　138
写真F-10　上保木の用借（圃場整備前）　140
写真F-11　上保木を通る大井手　140
写真F-12　防迫の用作　144
写真F-13　如意寺の用作　152
写真F-14　長尾文書番水帳のうち用作井手の部分　155
写真F-15　長尾文書 明和2年覚書　155
第七章
写真G-1　圃場整備以前の荒木村の水田　172
写真G-2　五ヶ村井手　175
写真G-3　五ッ俣　176
写真G-4　田川の空中写真　179
写真G-5　奥牟田　180
写真G-6　楢津周辺のクリークの景観　181
写真G-7　楢津の用作周辺の景観　182
写真G-8　クリークの景観　下牟田口の中園周辺　197
写真G-9　松浦山代文書　201
写真G-10　花宗川、下牟田口の水田　205
【第Ⅱ部】
第一章
写真H-1　嘉永5年 北浦定政の大内裏坪割図の一部　222
第二章
写真I-1　嘉暦4年 播磨国鵤庄絵図写　227
第四章
写真K-1　神足古市の状況（1979年）　242
第五章
写真L-1　久我庄の景観　251
第八章
写真O-1　万行・竹の端の景観　265
写真O-2　奥原のホリヌキの内部　270

服部　英雄

〈略歴〉
1949年　名古屋市に生まれる
1976年　東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程修了
同　年　東京大学文学部助手
1978年　文化庁文化財保護部記念物課勤務
1993年　九州大学大学院比較社会文化研究科助教授、現在に至る

〈主要論文〉
「平家物語の時代と農業用水」
（石井進編『中世の村落と現代』吉川弘文館、1991年所収）
「中世のムラの現地調査はなぜ必要なのか」
（石井進編『中世のムラ』東京大学出版会、1993年所収）
「巻向・穴師の山と水」
（永原慶二編『中世の発見』吉川弘文館、1993年所収）
「地名と歴史学―歴史地図の解読」
（『岩波講座　日本通史　別巻3』岩波書店、1995年所収）
「紀伊国垰田庄絵図の受難」
（国立歴史民俗博物館編『描かれた荘園の世界』新人物往来社、1995年所収）

〈現住所〉
〒810　福岡市中央区港1-10　簀子住宅3-12

検印省略

景観にさぐる中世―変貌する村の姿と荘園史研究―

一九九五年十二月二十日発行

著　者　服部　英雄
発行者　菅　英志
装　丁　山崎　登
印刷所　株式会社精興社
製本所　小泉製本株式会社
発行所　株式会社新人物往来社
〒一〇〇　東京都千代田区丸の内三―三―一
新東京ビルヂング
電　話　〇三(三二一一)三九三一〔営業〕
〇三(三二一一)三九三六〔編集〕
振替口座　〇〇一六〇―五―一五一六四三

乱丁・落丁はお取り替えいたします。
© Printed in Japan ISBN4-404-02319-7 C0021